

## 韓国宗教民俗研究会について

片茂永\*

今から7年前の2002年1月、ソウル市麻浦区にある聖宝文化財研究院を主要拠点にして発足した韓国宗教民俗研究会についてここに紹介させていただきたい。歴史といえるほどのものもなく、業績といえるほどの成果も何もないにも関わらず、ご関心いただいている方々には心から感謝の言葉を述べさせていただきたい。

もともと私が宗教民俗学のイロハを学び始めたのは日本の地であって、日本の宗教的風景に囲まれた環境での修学だった。というのは、寺や神社がまず眼に見える限りでの景観である上、村の中に入ってみるとそこには民間信仰といえるような類のあれこれが混じっている、そのような宗教民俗的な環境での探求だったのである。

さて、以上の環境をくっきり裏付けけるかのような膨大な研究業績は、日本の土壌で育まれた宗教民俗的な問題群の発掘並びに研究を語る上で申し分のない大系となっていたのである。ところが、日本の宗教民俗学を読めば読むほど、私が生まれ育った韓国の地が鮮明に浮かび上がるような妙な気がしてならなかった。というのは、私が幼少年時代を過ごした韓国京畿道水原市池洞109番地一帯の風景画からすれば、日本とは随分異なる世界が広がっていたからである。

例えばこんな風に広がっていた。村の真ん中を流れる細い川沿いには外見上普通に見られる寺がまず1つあって、村を挟むかのように立っている両側の丘の上には教会が1つずつあった。あの寺よりこの2つの教会の名前をいまだはっきり覚えているが、川のこちら側にはベダ

ニ教会、川の向こう側には第一教会だ。それに、細い川を少し下ったところの小高い丘には聖堂がまた1つあった。

ところで、あのお寺の記憶からすれば、夫婦の一人は僧服を着ている住職に見えたとし、奥さんのような女性はたまには踊りを踊ったりしながら変な声をあげたり、楽器をならしたりしたので、いま考えてみればあの女はきっとムーダン（巫女）だったに違いない。それに夫婦でやっている寺だったので、あの寺は少なくとも太古宗に属する寺か、そうでなければ、いまもよくあるように、宗派などとは無関係に勝手に寺を建てたケースかもしれないのだ。

ところが、この寺は子供の私にはあまり好きなどころではなかった。何故なら、その周辺のうるさいほどの騒音やくさいほどの線香を燃やす匂いが嫌いだったからである。しかし、ベダニ教会は子供たちや友たちにつれられてよく遊びに行った。礼拝のつもりで行った覚えはあまりないが、とにかくよく遊べたしろんなものをいただいた記憶がある。楽しい空間だったのである。クリスマスでなくても、日曜礼拝や特別礼拝日になると、友たちが朝から私を呼びに家に来ていた。高校のときはギターを弾きながら最新歌謡も歌えたとし、いろんな友たちと交流する場でもあった。

それに比べ、第一教会では結構神々しい儀式が行われたりした。プロテスタント独特の威厳さに充満されたあの教会の雰囲気は別に嫌なわけではなかったが、でもベダニ教会ほど気軽に行けるところではなかった。神の言葉を拝聴しに行く教会と、村人と付き合う公民館のような教会ぐらいの印象だろうか。いま私が住んでいる豊橋のアパートのすぐ隣には神明社という神社があるが、ここの境内で子供たちが遊んでいる光景をよく眼にする。私が生まれ育った村ではちょうどベダニ教会がそんな感じだったのである。

聖堂もあったと言ったが、周知のとおり、これはカトリック教会である。先の2つのプロテ

※愛知大学国際コミュニケーション学部教授

スタント教会に比べ、この聖堂はまた随分と異なる雰囲気だった。黒い服の女性たちが怖くて子供の時は一度も入ったことがないが、聖堂内に始めて入ったのは高校生になったからである。とにかく黒い服の人々が出入りするところとして記憶に残っているあそこは、でもとても懐かしい原風景のような音とともにいまだに私の記憶には残っている。毎朝、早朝礼拝を知らせる鐘を鳴らす音だったのである。何故かとても懐かしいあの音は、スピーカを通して広がる音や電子音ではなく、本物の鐘を人の手で打ち鳴らす音だったのである。

ところで、鐘となるともう一箇所、ベダニ教会からも夕方になると毎日同じく鐘を鳴らす音が聞こえてきたりしていた。結局、早朝と夕方、一日2回ずつ、聖堂と教会から聞こえてくる鐘の音は私だけでなく、村人の日常生活にかけがえない音、または時刻を知らせる神の音として根を下ろしていたのである。

ところがだが、ここまでは池洞109番地一帯の内に限る話であって、村の外へと向かういわゆる村境をやや越えたところには、もっと多様な宗教的風景画が広がっていた。その多様さをいまここに記すのは多分無理だろうから、家と直接関係があった2点だけをご紹介させていただく。1つは例の第一教会が立っていたあの丘をすこし越えたところであって、あそこには多くの占い師が大小の店を構えていた。御袋が家族の安寧と幸運を祈る際、まずはあの丘を越えたところの占い師を訪ねることから始まったことというまでもない。家の様々な喜怒哀楽や生老病死の物語は、あそこぬきには語れない。

もう一点、今度はベダニ教会が立っている丘の向こう側の小さい山の奥に、奉寧寺という寺があった。この寺は曹溪宗に属する立派な寺で、今は尼の仏教大学を兼ねているが、当時は男僧とともに、たくさんの信者で賑わっていたのである。私が目撃したり体験したりした仏教儀礼や釈迦降誕節を迎えての賑わいぶりは全てこの寺での記憶からのものが多い。それに、池洞

109番地一帯には奉寧寺からの托鉢僧がよく訪れていたのだ。托鉢僧が田んぼを歩いたり村の一軒一軒を訪ねたりする風景を風物詩のように思い浮かべるのももっぱらこの寺のお陰かもしれない。ある托鉢僧と御袋との門際でのやり取りも忘れられない。

以上に述べた景観は私が幼少年時代を過ごした村で毎日繰り広げられたいわゆる日常生活の中での宗教民俗的な出来事が発生したはずの空間的スケッチだった。さて問題は、私の精神に沈澱されているはずのそのような風景画は今の現代韓国になってからもほとんど変わっていないということ、そしてもう1つは、あれが別に私に限る体験ではないということであろう。

20世紀の半ば頃生まれ育った韓国人である限り、時や場所の別を問わず、仏教、プロテスタント、カトリック、巫俗、儒教、占い等からなる多宗教状況はだれもが歩んできたはずの共同記憶であり、今も進行中である共同体験なのである。現代のアパート団地の商店街には、例えば2階に教会があれば、その真上の3階には寺が入っているような雑居ぶり。こんな風景に戸惑う外部者がたまにいるが、しかしこれは数十年前の1つの村に教会と寺が共存していたあの風景のアパート版といえるのではないだろうか。

このような韓国版宗教民俗的な風景画をマクロ的かつミクロ的に見つめたり、分析を試みたりするには、どうしても以上述べたような現象をあるがままに凝視することがまず問われる。キリスト教中心的な欧米の宗教民俗学や神仏習合中心的な日本の宗教民俗学と区別されざるをえない理由はあのような土台からみても自明だったのである。

わたしが仏教民俗を中心に韓国宗教民俗論を模索すればするほど、あのような厳然たる景観からは遠ざかっていくような気がしてならなかった。それで、今は韓国の宗教学や民俗学では韓国人の宗教世界を語る上で、その段階別沈澱の具合を次のように理解するのが定番となっている。即ち、“巫俗等の俗信仰>仏教>道教>

儒教>天道教>キリスト教”のような沈澱構造だが、これを私も遅ればせながらやっと納得するようになったのである。中心から左方向は過去であり、右方向は現在である。度重なる歴史的沈澱作用によって形成された韓国人の宗教的精神世界をあのような沈澱構造として理解した場合、仏教民俗のみを措定したり切り出したりする韓国宗教民俗論に対して論理的無力さを感じたのである。

何よりも、現代の韓国人の普通の家庭から以上のような重層構造を発見したのは私の発想転換のための大きなきっかけとなった。池洞109番地一帯の景観はただの原風景ではなく、いまの韓国人の家々でも生き延びていたのである。それで、この頃の葬式では宗教ごとに異なる供養用品を霊前の前に用意しておくのが常である。例えば親がなくなった場合、兄が仏教式かといえば嫁はプロテスタント式、娘がカトリックかといえば、母は儒教式のようなやり方が共存するからである。池洞109番地で宗教間トラブルを目撃した覚えがあまりないように、あのような葬式の現場で問題になったとかの話は聞かない。やはりある外部者から、韓国はキリスト教国家になったとか、いやまだ韓国は儒教国家だとかいわれることがしばしばあるが、私の所見ではあれは多分短見だと思う。

とにかく、あのような背景から、多宗教状況のあるがままの全体図をまず研究の視野に入れるべく韓国宗教民俗研究会を結成する妥当性について声をかけてみたところ、幸い数名が集まってくれたのが2002年の冬だった。仏教1名、カトリック1名、プロテスタント1名が最初応じてくれた。それで数年経ったいまは儒教や巫俗、民間信仰をも含め各領域別3~4名ずつのメンバーが加わり、今は何とか「巫俗等の俗信仰>仏教>道教>儒教>天道教>キリスト教」の多宗教構造に近い人的構成になったのである。

いろいろと紆余曲折はあったものの、『韓国宗教民俗試論』(宗教民俗研究叢書第1輯)が出たのは2004年だった。はしがきでも明らかにし

たように、この書物は構成員の足並みを揃えてみるのが目的だった。それから主題研究を目指してきたつもりであったが、例えば第2輯『宗教와 祖上祭祀』(2005)、第3輯『宗教와 一生儀礼』(2006)、第4輯『宗教와 儀礼空間』(2007)、第5輯『宗教와 그림(絵画)』(2008)のように発展してきた。

ここで第5輯『宗教와 그림(絵画)』(2008)は、韓国に伝わる各種宗教画を解いていく試みであって、韓国の諸宗教画が一堂に集まった意義が認められよう。例えば、その目次を提示すると次のとおりである。

第1章 片茂永：宗教と絵画のための序論—蓮華神人出生神話のグロカリゼーション

第2章 具美来：八相図を通してみた釈迦牟尼出生の民俗学的考察

第3章 金承熙：靈魂の視線—博物館で見つけた朝鮮時代の仏教絵画

第4章 金憲宣：甘露帳の構造と時代的意味—高靈山普光寺甘露帳を中心に

第5章 金榮洙：韓国カトリック美術の展開様相に対する民俗学的接近

第6章 李福揆：韓国プロテスタントと絵画

第7章 金美榮：儒教倫理の教化書、『三綱行実図』

第8章 金時徳：儒教式祭祀実践のための感慕如在図

第9章 金在浩：朝鮮後期民画の生態学的背景と烏虎絵の宗教呪術性

第10章 梁鍾承：ソウル梨泰院府君堂の巫神図

第11章 金萬泰：鬼神、そして符籙の呪術性と象徴性

第12章 金仁喜：中国アウの文様を通してみたトゥオヌオ族の歴史認識

以上で第1章は、韓国の仏教寺院のなかでも特に本堂の東壁によく描かれている毘藍降生相(釈迦降誕図)の謎に迫りつつ、その起源が中国やインドはもちろん、古代のエジプトにまで

遡ることを追求した。つまり、シッゲルタの誕生にはマヤ夫人の右脇とともに蓮華の花弁が二重に関わっている問題を取り上げたが、それには仏教以前からの広範囲にわたっての文化の拡散と同時に長い歳月をかけての地域ごとの土着化の結果であることを明らかにした。右脇からの不思議な誕生物語は古代エジプトからの蓮華神人誕生モチーフの神話と習合することによってさらなる神秘的な仏教神話へと発展したし、それが韓国に至っては巫俗のなかにまで沈澱されてきたのである。

第2章「八相図を通してみた釈迦牟尼出生の民俗学的考察」(具美来)は、釈迦牟尼の一代記が8枚に縮約された仏画に対して民俗学的な分析を試みる研究である。中国伝来の八相図にはインド的な要素とともに中国的な要素、それに18世紀以降の朝鮮風の要素が加味されていて、まさに文化混合の典型といえる。神話学、哲学、仏教学、美術学、民俗学等諸領域からの関心が寄せられている八相図であるだけに、具の研究は多方面から注目されている。

第3章「靈魂の視線—博物館で見つけた朝鮮時代の仏教絵画」(金承熙)は、仏画に内在された人間の根本問題、なかでも特に韓国人の生死観を問いかける研究である。美学や哲学を背景に論究する金の研究は韓国仏教民俗論の地平をさらに広げてくれたことは間違いない。地獄図の現代的読み方は見事である。民俗学の限界を金は美学をもって難なく超えてくれている。文化哲学や社会学等との共同研究を模索する韓国民俗学にとって1つの研究モデルが提示されたような気がする。

第4章「甘露嶺の構造と時代的意味—高靈山普光寺甘露嶺を中心に」(金憲宣)は、仏教史や絵画技法に偏っていたこれまでの甘露嶺研究の視点から一歩離れ、仏画全体に対する構造分析やそこに描かれている過去の日常生活を一つひとつ解いていくような新しい方法が評価された。著者自らが民俗学に立脚しているからにはほかならない。仏教絵画は仏教の占有物ではなく、

時代時代を反映しつつ変遷を重ねてきた社会史の結果物として受け止める限り、甘露嶺もこれからは仏教学、民俗学、歴史学、国文学等の学際的研究が望ましいという事実を、事例を通して自覚させてくれたのである。

第5章「韓国カトリック美術の展開様相に対する民俗学的接近」(金榮洙)は、外来文化である欧米のカトリックが韓国の土着文化とどのような葛藤ないしは妥協を見せてきたのかにスポットを当てている。神仏習合流でいえば、神カ習合のような研究になろう。ただその葛藤や妥協の表れを、絵画をして語らせることに特徴がある。例えば韓国カトリックの聖画からは、朝鮮風瓦屋の聖堂、朝鮮伝統衣装の神父、チマチョゴリ姿の聖母マリアや韓国伝来の巫神図そっくりの聖母マリア、聖母マリアの仏教風後光、観音像風のマリア、十字架文様の壺等が紹介されていて、まず土着文化がカトリックに及ぼした影響が鮮明に浮かび上がっている。

第6章「韓国プロテスタントと絵画」(李福揆)は、韓国にプロテスタントが伝来されてからどのような土着化の道を歩んできたのかを教えてくれる数枚の聖画が取り上げられている。イギリスの小説『天路歷程』の翻訳本における挿絵をはじめとして、イエスの降誕、最後の晩餐、イエスの農村伝道、受難されるイエス等の聖画は等しく朝鮮的背景で起こった出来事として描かれていた。欧米から直輸入された聖画と一線を画するこのような聖画はプロテスタントの韓国的土着化を物語る重要な事例なのである。さて、インドから発生した仏教が中国経由で朝鮮に伝来された際も、中国化された様々な仏画—特に八相図—が同時に伝えられたことを思い起こせば、時代の差があるにせよ、文化の伝播と変容におけるある種の原則があるような気がする。

第7章「儒教倫理の教化書、『三綱行実図』」(金美榮)は、朝鮮時代の15世紀に編纂された『三綱行実図』の所々に描かれた挿絵を取り上げつつ、朝鮮時代の倫理規範でもあった孝・

忠・烈の思想を事例とともに説明している。初版がでたのは15世紀だったものの、19世紀にいたるまで何回も版を重ねていたので、当然ながら挿絵も多様化してきたはずだ。現代韓国社会も儒教的生活規範や観念を完全に払拭したとはいえないので、祖先たちが抱いていた儒教に基づいた精神世界がここから映し出される部分多いと思う。

第8章「儒教式祭祀実践のための感慕如在図」(金時徳)は、祖先祭祀が社会の道德であり規範でもあった朝鮮時代の断面を示してくれるに相応しい研究テーマである。即ち、感慕如在図(祀堂図)とは、祖先祭祀を執り行うためには祀堂が必要だったが、別途の祀堂を建てるほどの余裕がなかったり、または長期間の遠隔地勤務を命じられたりした場合、祀堂の代わりになってくれる何かが必要だった。それで作られたのがこの感慕如在図であって、いわば仮の祀堂だったのである。掛け軸や屏風など様々な形の感慕如在図が描かれていたが、家から離れたところでもこの絵さえあればまるで自分の家で祭祀を行うような気分になったかもしれない。とてもユニックな文化であって、儒教と仏教との習合を物語る感慕如在図があるなど、儒教社会さながらの文化だったのである。

第9章「朝鮮後期民画の生態学的背景と烏虎絵の宗教呪術性」(金在浩)は、今までの民画研究の大半が美術史からだったのに対し、これからは宗教学や生態学から問うべきだと主張する。特に16~19世紀のあいだほぼ全世界を襲っていたいわゆる小氷期(Little Ice Age)により、社会全般的には呪術的機能を持つ様々な民間信仰の需要が高まったことを烏虎絵という朝鮮民画の流行理由として挙げている。自然環境の変化のような生態学的問題が実際に社会や文化にどのような影響を与えるのかを考えさせてくれる現代的課題でもあろう。

第10章「ソウル梨泰院府君堂の巫神図」(梁鐘承)は、意外と研究の乏しい巫神図を取り上げている。巫俗研究が盛んだったことを考える

と巫神図研究は本当に少なかった。それで、梨泰院府君堂に伝わる巫神図だけでも様々な類型があつて一概には言えないということが分ったが、それには仏教、儒教、道教の習合ともに、伝来の土着神話も加わるなど、まさに韓国伝来の神々の総出であることを教えてくれる貴重な資料が提示された。

第11章「鬼神、そして符籙の呪術性と象徴性」(金萬泰)は、韓国伝来の各種符籙が一つ一つ対応する鬼神によって規定され、なおかつ形作られていることを明らかにしている。魔除けの目的で何らかの符籙を身につけたりある物のなかにそれを入れておいたりする風習があるが、魔の種類が多い分だけ、符籙の種類も多い。つまり、符籙の時代ごとの変化を分析することによって、その時代を生き抜いてきた人々の心を読み取れることも可能になってくる。過去の人々は何を恐れていて何を夢見ていたのかが、符籙一つひとつに映し出されているからである。さて、現代韓国人はいまだ符籙から逃れてないのが現実であるので、はたして符籙の連続性は何であり、今の非連続性は何なのか、楽しみである。

第12章「中国アウの文様を通してみたトゥオヌオ族の歴史認識」(金仁喜)は、広西省トゥオヌオ族に伝わる先祖神からいただいた伝統衣装の調査内容が論文の基になっている。衣装そのものが先祖神と子孫とを繋いでくれる媒介であるだけでなく、衣装に施された文様は日常生活でのその人の位置を示してくれる記号であったり、トゥオヌオ族の歴史に導いてくれる歴史書であつたりするから、トゥオヌオ族にとって伝統衣装とはアイデンティティの結晶そのものであろう。宗教的神話まで読み取れるかどうか今後の課題のようである。

以上、全部で12本の掲載論文を垣間見てみたが、そのほとんどは韓国の仏教、プロテスタント、カトリック、儒教、巫俗、道教、民間信仰等が相互習合しあう多宗教習合現象を取り上げる研究だった。多宗教習合現象は今回の共同研

究ではじめて明らかになったケースもあったが、その結果、例えば仏教と民俗との習合だけを取り上げつつA+B=ABかCかというような議論がどれほど短絡的かつ研究者中心のかが知らされたような気がした。仏教が儒教や道教と習合したかと思えば、その習合結果にはさらにカトリックが便乗したり、そこにまた現代風巫俗が加わったりするからである。研究方法論の上では、あのような多宗教習合現象をどこまで見極めてからの穿鑿だったのかについて研究者ごとの偏差があったものの、少なくともそのような研究志向を共有する研究会であることだけは紛れもない事実である。

このような研究志向が目指すのは、巨視的に

は韓国文化の理解であり、微視的には韓国宗教民俗の理解であることというまでもない。韓国京畿道水原市109番地一帯で生まれ育った私にとって、文化的原風景の1つ目は多宗教環境だったし、2つ目は多宗教共存だったのである。それも‘他者’同士の共存というより、‘多者’習合としての共存だったことは、今の多宗教現象をあるがままに見る素直な姿勢に繋がったのではないかと考えている。これからもその土台を大事にしていきたいところである。

目下、第6輯のための主題をめぐり会員同士の話し合いが進められている。どのような企画テーマになるにせよ、多文化現象に対する遠近法的な私たちの実験はこの先もつづきそうだ。

#### 新刊紹介

### 石垣市総務部市史編集課 『石垣市史叢書16 北木山風水記』

北木山とは八重山の異称である。本書は首里から派遣された風水師の与儀通事親雲上鄭良佐が八重山の風水を検分して蔵元へ提出した報告書である。乾隆36年(1771)の大津波によって、八重山は総人口の3分の1を失った。大津波後、村々の再建が図られたが、相次ぐ飢饉や伝染病のため八重山の復興ははかばかしくなかった。津波によって激減した人口は明治6年まで増えることはなかった。津波以降の村の再構成時に風水鑑定がなされなかったこと、さらに新村の創設時にも風水鑑定がなされなかったことに各村の疲弊の原因があるのではないかと協議された結果、風水師の派遣が申請された。

同治2年(1863)に来島した与儀通事親雲上は、石垣島(14カ村)、竹富島、黒島、新城島、西表島(14カ村)、鳩間島、小浜島の各村の風水を検分してこの報告書を書き上げた。彼は有能な風水師だったようで、八重山のみでなく琉球各地の風水を検分している。

同書では、風水の道理を説きながら山々

の植林や繁茂する木々の伐採を勧め、個々の村々の道路の開閉、獅子や石敢当の設置、家の門・竈・井戸・便所の位置の変更などを細かに指摘している。検分された村々のうち、名蔵村・後間村・安良村・伊原間村・桃里村・宮良村・南風見村・仲間村・高那村・鹿川村の10カ村は移動が勧告されている(これらの中には明治以降廃村になった村々がみられる)。南風見村などは、「おそらく住んでいる人は湿気のために病がちとなり、子供を生み育てることができなくなるであろう」とまで記されている。さらに、各村の子供の腹が張って色が青いのは山水の湿気を受けるためであり、腹掛けを作り、唐辛子・生姜を食べ、手のひらでその腹部を暖めよと記しているが、ここにも八重山の疲弊振りがうかがわれる。

本書は八重山の風水についての記録であるばかりでなく、当時の八重山の疲弊の記録にもなっている。(古谷野洋子)

2009年1月発行 発行：石垣市

販売価格：800円